西條八十童謠全集

新潮社出版

西條八十
童謠全集

新潮社

西條八十・童謠全集

新潮社出版

西條八十
童謠全集

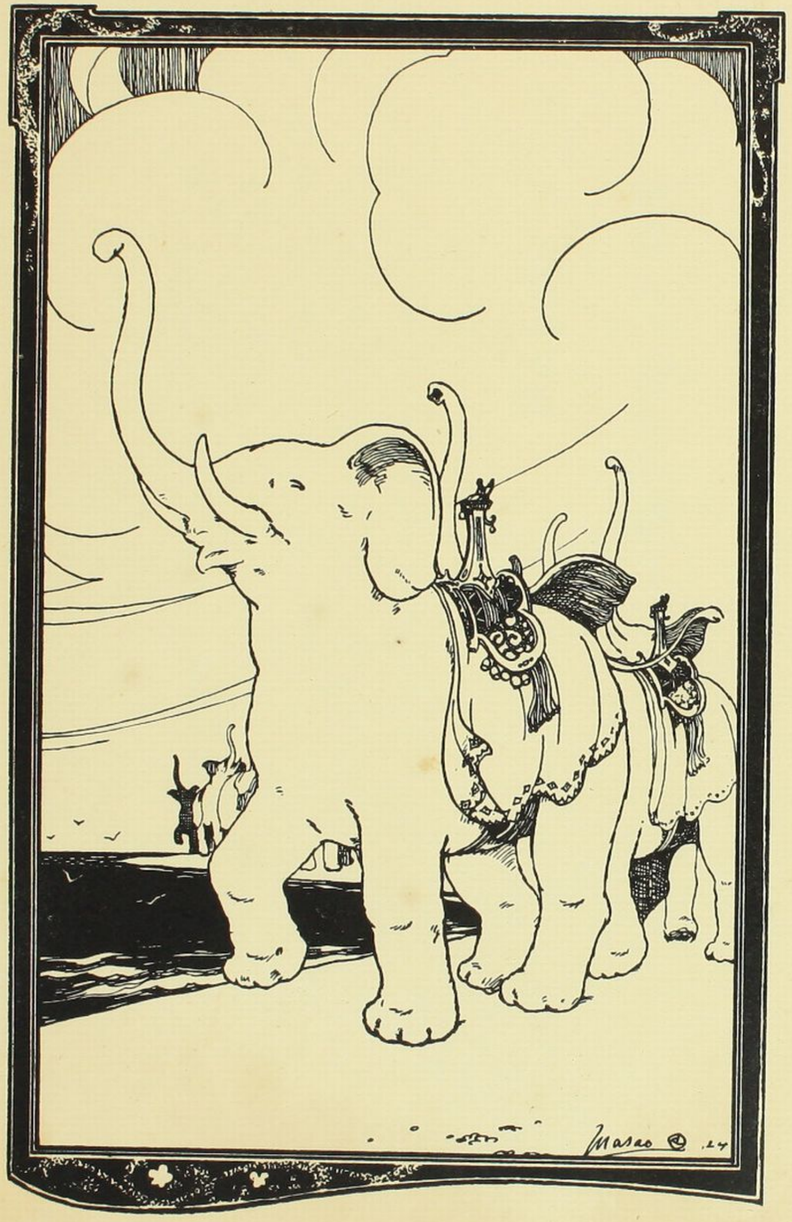
新潮社

西條八十・童謠全集

西條八十
童謠全集

西條八十童謠全集

新潮社出版


Masao © 24

西條八十童謠全集 目次

思慕と追憶

*つくしんぼ……三
幌馬車……七
*山の母……一〇
*古い港……一四
おもひで……一六
*かくれんぼ……一九

*春の日……一九
ヨット……二二

未知の世界

お菓子の家……二七
手品……三〇
小人の地獄……三三
*巨きな帽子……三六
象と芥子人形……三九
床屋の小僧の唄……四二

*白いボオト……四五

四つの物語

*玻璃の山……五一
*九人の黒んぼ……五四
雪の夜がたり……五七
島の一日……六一

鳥のうた

*かなりや……六七

*たそがれ……六九
*烏の手紙……七一
*燕のをぢさん……七五
*電信柱の帽子……七五
*雪の夜……七七
*嵩ひよろひよろ……八〇
*燕と時計……八三
*ひばり……八五
歸る燕……八七
鳥と人……八九

獸のうた

*村の英雄……九五
*象……九七
月と猫……九九
羊……一〇一
*犬と雲……一〇三

蟲のうた

*蝶々……一〇五

こほろぎの唄……一二五
きりぐす……一二八
濱邊の出來事……一三一
蝸牛の唄……一三三
こほろぎ……一三四
蟻……一三六
春のくれがた……一三八

唄

*冬の朝の唄……一三三

ほそみち……一三四
海山小唄……一三七
*夕ぐれの唄……一三九

花と草木

*薔薇……一四二
巨きな百合……一四五
*あしのうら……一四七
たんぽぽ……一五〇
さくら……一五三

*巴旦杏の夢……一五五
向日葵……一五七
葱坊主……一五九
落葉……一六一

子供の生活

丘の上……一六五
かるた……一六八
藥とり……一七一
草鞋をすてて……一七三

*のこり花火……一七五
*怪我……一七八
*お留守の玩具屋……一八〇
夕顔……一八二
*活動寫眞……一八六
廻り燈籠……一八八
*お山の大將……一九一
坂……一九四
*玩具の舟……一九七

我家の人々

母さんの眼……一〇一
頬ひげ……一〇二
祖母と鶴……一〇四
*雨夜……一〇六
*肩たたき……一〇七
海邊で……一〇八
ねえや……一〇九

見知らぬ人々

お隣さん……一一六

泣きぼくろ……一一一
船頭の子……一一二
*牧場の娘……一一四
赤い獵衣……一一五
木のぼり太右衛門……一一六

天と地

*お月さん……一一八
*夏の雨……一一八
雪の手紙……一二〇

花火……一二四
*畫のお月さん……一二四
*星と苺……一二五
*川邊の夕ぐれ……一二〇
お清書……一二三
秋風……一二四
*水たまり……一二六
*しぐれ……一二八
案山子と海……一二〇

玩具と道具と食物

*蠟人形……一二五
*鉛の兵隊……一二七
こどもの椅子……一二〇
古銀貨……一二一
夢の人形……一二五
寂しい旅人……一二八
親子の針……一二〇
*人形の足……一二一

鉛筆の心……二八五
*雲ふる夜……二八八
はがき……二九〇
麥藁帽子……二九二
ながれ椅子……二九四
*時計屋の時計……二九六
なくした鉛筆……二九八
大毬小毬……三〇〇
仲よし小よし……三〇二
お皿の祭……三〇四

お菓子の汽車……三〇七

謎

謎（一）……三一一
謎（二）……三一三

やさしい歌

ほこり……三一九
來い來い來い……三二一

帽　子……三三三
かへりみち……三三四
畫の出來事……三三六
手紙かき……三三八

譯謠集

*子供と鼠（ロオレンス・アルマ・タデマ）……三三四
お庭で（ロオレンス・アルマ・タデマ）……三三六
雲雀と金魚（ロオレンス・アルマ・タデマ）……三三八
誰もわたしを（ロオレンス・アルマ・タデマ）……三四〇

進軍の歌（ロハート・ルイス・スティーヴンスン）……三四三
唄（ロハート・ルイス・スティーヴンスン）……三四八
寢臺の舟（ロバート・ルイス・スティーヴンスン）……三四八
*人形（クリスティナ・ロセッティ）……三五一
*風（クリスティナ・ロセッティ）……三五三
さくらんぼ（クリスティナ・ロセッティ）……三五五
馬に乘つたひと（ウォータ・デ・ラ・メーヤ）……三五七
豚と炭燒き（ウォータ・デ・ラ・メーヤ）……三五九
ふうりんさう（ウォータ・デ・ラ・メーヤ）……三六一
老ぼれ兵隊（ウォータ・デ・ラ・メーヤ）……三六四

かりうど（ウォータ・デ・ラ・メーヤ）……三六六
支那の子守唄……三六八
タぐれ（セエ・カルツレエ）……三九九

西條八十童謠全集

思慕と追憶

大人とは背丈の伸びたる小兒の謂のみ

ドライデン

つくしんぼ

見知らぬ人に負はれて
越えた旅路のつくしんぼ

見知らぬ人は黑外套
顏もおぼえず　名も知らず

いづくの國か　いつの世か

月さへほそい春のくれ

けふ片岡にひとり居て
夢のやうにもおもひだす

見知らぬ人に負はれた
遠いその日のつくしんぼ。

幌馬車

大晦日の晩に
幌馬車が通つた

珈琲いろの馬が
鬣そろへ

お客ものせず

灯もつけず

今年の夢を
送りの馬車か

霙の辻で
のぞいて見れば

うすむらさきの
褥のうへに

しをれた薔薇と
指環がひとつ。

山の母

いつも見る夢
さびしい夢
月の夜ふけの
山の上

青いひかりに
ぬれながら

うちの母さま
ただひとり

草も生えない
岩山の
白い素足が
いとしうて

泣いてまねけど
もの言はず

風に搖れるは
影ばかり

いつもさめては
さびしい夢
月の夜更けの
山の上。

古い港

古い港
お晝の港
ぼくらはボートを着けました

淋しい港
曇つた港
紫蔵が咲いてゐた

町中廻つて見ましたが
どこの家でも眠てるので
ぼくらは寂しく去りました

古い港
眠てゐる港
紫蔵よさやうなら。

おもひで

向日葵を
一輪持つた女でした

やさしい聲でひそ〳〵と
僕に話をしてくれた

七尾から伏木へわたる船の中

十四の夏のひとり旅
わかれた濱の白い雲
ああ　その瞳さへ忘られぬ
向日葵の
母さんに似た女でした。

かくれんぼ

おもひだすのは
かくれんぼ
待てどくらせど
來ぬ鬼に
さびしい納屋の

檻子から
そつと覗けば
裏庭の
柿の木にゐた
みそさざい。

春の日

行つたり　來たり
昨日も今日も
山のうへを
白い雲が

行つたり　來たり
昔のままの

お室の時計
錆びた振子

行つたり　來たり
窓の下は
花の祭
馬車と人が

行つたり　來たり
春の日かげの

母亡き室を
小さい風が。

ヨット

夏の日の
白い快走艇が懐かしや

抜手でそばへ行つたらば
舷にゐた美しい
廿歳ばかりの姉さんが

大きな百合を呉れたつけ
夕日の中に船は消え
あとには青い渦ばかり
主も知らぬ遠い日の
白い快走艇をおもひだす。

未知の世界

兒童が樂しむところのものは未知の世界への遠征である。　ランゲ

お菓子の家

山のおくの谿あひに
きれいなお菓子の家がある

門の柱は飴ん棒
屋根の瓦はチョコレイト
左右の壁は麥落雁
踏む鋪石がビスケット

あつく黄ろい鎧戸も
おせば零れるカステイラ
静かに午をしらせるは
金米糖の角時計

誰の家やら知らねども
月の夜更におとづれて
門の扉におぼろげな
二行の文字を讀みゆけば

「こゝにとまつてよいものは
ふたおやのないこどもだけ。」

手品

こんな手づまが使ひたい

お父さんに
お母さん
お姉さんの舞踏靴
昨夜貰つた巴旦杏

竈のうへの黒猫に
窓から見える帆前船
教會堂の圓屋根と
屋根にとまつた白鳩と

みんな纏めたそのうへに
青いマントをおひかぶせ
明けりや眞紅な薔薇になる

こんな手づまが使ひたい。

小人の地獄

「大地獄ぢや
小地獄ぢや」

ひろい畠の
まんなかで
小人がしくしく
泣いてゐる

なんで泣くぞと
訊いたらば
足の下から
火が燃える

段々畠の
眞晝間
煙ものぼらぬ
青い空

跳る小人を
抱きあげ
踵の底を
よく見れば

眞紅な眞紅な
豆の花
それでも小人は
泣きじやくり

「大地獄ぢや
小地獄ぢや。」

巨きな帽子

とても巨きな
麥藁帽子
波のまにまに
うち上げられた
鍔のまはりで
競馬も出來よ

卷いたリボンで
天幕も張れよ

城の殿さま
兵隊つれて
峰を越えるに
七日も掛つた

誰がかぶつて
棄てたか海に

とても巨きな
麥藁帽子。

象と芥子人形

大きな象が
十八頭
芥子人形が
十八人

象の背中にや
黄金の鞍

芥子人形は
緋の手綱

のどかな唄と
手拍子で
春の渚を
練つてくる

折も折とて
青空が

いつか曇つて
俄雨

大きな象は
びしよぬれに
濡れても逃げて
戻つたが

人形可愛や
砂のなか

七日たづねて
見あたらぬ。

床屋の小僧の唄

けさも早くに起されて
黒く茂つた毛の林
銀の鋏で刈りゆけば
誰か小僧と呼ぶやうな
覗きや林のくらがりに
いつか蹲んだ赤頭巾

小人がひとり笑つてる

逃すまいぞと　どこまでも
黒く光つた毛の林
銀の鋏で追ひゆけば
消えちやまた出る赤頭巾

うつる鏡に驚いて
銀の鋏の手を止めりや
お客はとうに圓坊主。

白いボオト

白いボオトが
ゆら〳〵と
遠い渚に
つきました

白いボオトが
積んだのは

キャンディー　プリン、
カステイラ

色とり〴〵の
花菓子や
銀で包んだ
チョコレエト

舟のなかには
誰も居ず

無人島の
合歡の木に

赤い鸚哥が
首かしげ
今日も眺めて
居りました。

四つの物語

玻璃の山

玻璃の山のてつぺんに
黄金のお城がありました
城の塔にはお姫さま
囚になつて居りました
王子は姫を救はうと

山のまはりを回ります
玻璃の山の滑らかさ
馬の蹄もいくすべり

落ちてのぼつて十九年
王子の劍も錆びました

お姫さまは待ちつかれ
つひに果なくなりました

王子もいつか老つて
麓の村で死にました

お城の姫の亡骸は
眞紅な薔薇になりました

王子を埋めた麓には
青い龍膽が咲きました。

九人の黒んぼ

九人の黒んぼが
ずらりと並んだ
　誰も知らない濱邊の話

大きな禿鷹
沖から飛んできた
　波の靜かな朝の話

大きな禿鷹
黒んぼを攫つた
　はじめは四人　それから五人

空には泣聲
濱邊の砂にや
　赤い頭巾が九つ殘つた

九人の黒んぼが

そろって失せた
誰も知らない昔の話。

雪の夜がたり

雪はふるふる
夜の街に
あはれな母子がありました

「母さん、ぼくは歩けない
お腹がすいて歩けない
麺麭のかけでも欲しいな」と

男のこどもが言ひました

「おお　おお　さぞや饑じかろ
何なと買つてあげたいが
お金はつきる宿もない
せめてこの夜が明けたら」と
母は涙で言ひました

雪はふるふる
月の夜の

他國の街は更けてゆく
母子ふたりは抱きあひ
うすいマントに裏まつて
冷たい夢に入りました

その翌朝の青い空
雪消のみちにゆくりなく
落ちたマントを拾ひあげ

町の巡査が裡見れば
やさしく咲いた水仙の
花がふたもとありました

雪はふるふる
世とわかれ
母子は花と化りました。

島の一日

背負つた　背負つた　よ
海賊どもが
沖で盗んだ大きな嚢

重い　重い　よ
轉げずのぼれ
人の知らない椰子の木島へ

明けた　明けた　よ
金貨の山に
岩も砂地も夕日の色よ

飲めや　歌へ　や
大酒盛で
髭の男がそろつて踊る

覺めた　覺めた　よ

磯山かげの
鰐のおやぢの午睡の夢が

そこで　出した　よ
大酒盛の
なかへぬつくと巨きな頭

逃げた　逃げた　よ
度膽をぬかれ
人も囊もざんぶり海よ

のぼる　のぼる　よ
無人島の
椰子の葉かげに今夜も月が。

鳥のうた

われと來て遊べや親のない雀　一茶

かなりや

唄を忘れた金絲雀は　後の山に棄てましよか。
いえ　いえ　それはなりませぬ。
唄を忘れた金絲雀は　背戸の小藪に埋けましよか
いえ　いえ　それはなりませぬ
唄を忘れた金絲雀は　柳の鞭でぶちましよか

いえ　いえ　それはかはいさう

唄を忘れた金絲雀は
象牙の船に　銀の櫂
月夜の海に浮べれば
忘れた唄をおもひだす。

たそがれ

唄を忘れた
金絲雀は
赤い緒紐でくる〳〵と
いましめられて
砂の上
かはいさうにと

妹が
なみだぐみつゝ
解いてやる

夕顔いろの
指さきに
短い海の
日がくれる。

烏の手紙

山の烏が
持つてきた
赤い小さな
狀袋

あけて見たらば
「月の夜に

山が燒け候
こはく候」

返事書かうと
眼がさめりや
なんの　もみぢの
葉がひとつ。

燕のをぢさん

燕のをぢさん
ご機嫌よう

わたしは十四に
なりました

姉さんはお嫁に

ゆきました

あなたも白髪が
ふえたでせう

去年の古巣に
顔出した

燕のをぢさん
ご機嫌よう。

電信柱の帽子

電信柱の
言ふことにや
「夏が來たから
僕だつて
紺の帽子を
かぶらうか」

どんな帽子か
よく見れば
たかい柱の
てつぺんに
ちよいととまつた
燕。

雪の夜

紅いペンキで
鶏鵡をそめりや
雪の降る夜の
窓からにげる

何處へゆくのか
眞紅な鶏鵡

白い野原を
ひよこ〳〵と

峠三里の
月あかり
鸚鵡さすがに
疲れてねむりや

あかいあの火で
暖らうと

山の近眼の獵人が
鐵砲も忘れて飛んできた。

鳶ひよろひよろ

鳶ひよろひよろ
ひようろひよろ
おなかが空いて
ひようろひよろ

山から町へ
出てくれば

親の無い子が
泣いてゐた

親の無い子の
あぶらげは
欲しさは欲しし
とれもせず

鳶こらへて
ひようろひよろ

もとの山へと
ひようろひよろ。

燕と時計

秋がきたとて
ふるさとの
南へいそぐ
燕

ゆくては遠い
アフリカの

船の時間を
氣にかねて

酒屋の軒で
宙がへり
時計をのぞく
燕

ひばり

ぴいちく　ぴいちく
聲ばかり

麥の畑の
揚雲雀

姿はどこと

見あげれば
青い空には
晝の月

ぴいちく雲雀は
聲ばかり。

歸る燕

燕が歸る
燕が歸る
秋が來たとて
南へ歸る

燕よ　お待ち
おみやげあげよ

おまへの頸に
花簪結ぼ

燕よ歸れ
南の國へ
赤い簪
見せ　見せ　歸れ。

鳥と人

白い鳥
黑い鳥
そろつて飛ぶ
朝の通り
晴れた通り
月給とり

勘定とり
ならんで通る
晝の通り
電車通り

白い鳥
月給とり
黑い鳥
勘定とり
まじつて歸る

夕の通り
暮れる通り。

獸

の

村の英雄

村の大きな黒牛が
春の夕ぐれ死にました
永年住んだ牛小舎の
寢藁の上で死にました

女やもめのご主人に
いつも仕へた忠義もの

朝晩重い荷を曳いて
くろはすなほな牛でした

お寺の鐘は鳴りません
けれども花は散ってます
村のやさしい英雄が
春の夕ぐれ死にました。

象

巨きな象が欲しいな

緋の總さげて
黄金の鐙つけて

頭のうへにお父さん
尾のうへにお母さん

僕が間へ挾まれば
山も湖も豆のやう
市も村も芥子のやう

天氣の日には歌うたひ
雨のふる日は傘さして
ゆうらり　ゆうらり乘つてゆく
巨きな象が欲しいな。

月と猫

おしやれの三毛ちやん
緣がはで
今夜も顏を
あらつてる

三毛ちやんの鏡は
お月さま

空にまあるい
お月さま

顔がうつるか
うつらぬか
おしやれの三毛ちやん
縁がはで
すまして顔を
あらつてる。

羊

羊、羊、
まつしろな羊
やさしい羊
あつたかい春の日に
青い草をたべながら
そろつて通る羊

名を呼びや
ふりかへる
お母さんの瞳に
一寸似た羊の瞳。

犬と雲

昨日も今日も
尨犬よ
沖を眺めて
なぜ吠える
海のむかうの
眞白な

あの巨犬が
恐いのか

啼くな可愛の
尨犬よ
あれは寂しい
旱魃雲

おまへが吠えて
追はずとも

日さへ暮れれば
消えよもの。

蟲のうた

こい〳〵といへど螢は飛んでゆく　鬼貫

蝶々

旅商人の
蝙蝠傘に
蝶々がひとつ
とまつた

海岸町の
晝日なか

黄いろい翅を
すりあはせ
蝶々はとろり
ひとねいり

旅商人は
船にのる
船はどこゆき
印度ゆき

赤い煙突
ぼうと鳴りや
右も左も青い海

椰子の葉かげに
月が出て
知らぬ他國で
眼をさます
蝶々のこころは寂しかろ。

こほろぎの唄

こほろぎ　こほろぎ
淋しいな
おまへの唄は
淋しいな

おまへの唄を
聽いてると

古い時計に
古い椅子
古いランプで
糸紡ぐ
病んだ娘が
見えてくる

どこの娘か
知らないが
なぜに見えるか

知らないが

こほろぎ　こほろぎ
夜ふけて
おまへの唄は
淋しいな。

きりぎりす

きりぎりす
きりぎりす
そつと捉へて
姉さんの
紅い手函に
忍ばせた
ゆうべの夢の

きりぎりす

銀の八時の
目覺時計が
ちりちりちりと
鳴るころに

蓋をはねれば
緋鹿子の
きれに包まれ

翡翠の櫛と
なつてころげた
きりぎりす。

濱邊の出來事

芒のかげの
赤牛ねむれ

蟻が三匹
ひとりごと――
「こゝにあるのは

お城か山か
路がまはりて
遠ござる」

濱邊の雨だ
赤牛にげろ

蟻が三匹
ひとりごと――
「消えて失せたは

お城か山か
路はひとすぢ
近ござる」

芒のかげは
夕燒小燒。

蝸牛の唄

のがろり、のがろり蝸牛
日がな一日のがぼつて
櫛の木で何見た

一本目の枝で
見えたは牛の子　隣の牛の子
母さんに抱かれて藁の上

二本目の枝で
見えたは娘　むかひの娘
窓で手套編んでゐた

三本目の枝で
見えたは海よ　白帆のかげが
あつちにもこつちにも

四本目の枝で

つい日が暮れた
金貨のやうなお月さま
葉つぱのかげから今晩は。

こほろぎ

こほろぎが
こほろぎが
電話のくちに
とまつてた

夜ふけて
誰と話さう

こころやら

こほろぎが
秋の夜の
自働電話で
啼いてゐた。

蟻

蟻　蟻
寂しかろ

はこべの葉つぱに
ついてきた
道灌山の
黒蟻を

神田の通りで
放したが

蟻　蟻
寂しかろ
路がわからず
さびしかろ。

春のくれがた

築山のかげを
附木の馬車が通つた

エツチラ　オツチラ
曳いてたは
黒い二匹の鋏蟲

うへで居睡りしてゐたは
頭の長い頬の赤い
土筆の和尚さん。

唄

冬の朝の唄

子供よ　揃つてどこへ行く
白い蠟燭　手に持つて
今日も今日とて雪空に
朝の谷川丸木橋
霧が晴れねば危かろ
母様ぼくらは参ります

白い蠟燭　灯つけ
深山の奥のその奥で
雪に凍える小鳥らの
巣を温めに参ります。

ほそみち

—こゝはどゥこのほそみちぢや
—とうさんのあたまのほそみちぢや
—ちよつととほしてくださんせ。
—ごようのないものとほしやせぬ
—おもちやのじどうしやはしらせに

—どこからどこまではしらせる。
—まゆからつむじへはしらせよう
—とほりやんせとほりやんせ
ゆきはよい〳〵かへりはこはい
ひるねのとうさんめをさます。

海山小唄

右に高下駄
左に草履
からり　ぞろりと
街道をゆけば

右の山から
芒がまねき

ひだり海邊で
鷗が呼ばふ

どちら行かうぞ
跛の下駄で
みちははろばろ
日が暮れる。

夕ぐれの唄

いも蟲こゥろころ
瓢簞ぽッくりこ

お日さまこゥろころ
西のお山へこゥろころ

お月さんぽッくりこ

春の空にぽッくりこ
乳母車がァらがら
そろそろお家へがァらがら
坊やはぱッちりこ
まだまだお眼がぱッちりこ。

花と草木

薔薇

船のなかに
忘れた薔薇は
誰が拾つた

船のなかに
殘つたものは
盲人がひとり

鍛冶屋がひとり
鸚鵡が一羽

船のなかの
赤い薔薇を
拾つたものは

盲人がひとり
見てゐたものは
青空ばかり。

巨きな百合

「湖水のふちへ行かなけりや
巨きな百合は採れません」
麓の木樵が言ひました

「お山のてつぺんへ行かなけりや
巨きな百合は折れません」
湖水の船頭が言ひました

そこでてつぺんへ行つたれば
懸巣の鳥が言ひました
「青い空まで行かなけりや
巨きな百合はありません。」

あしのうら

赤いカンナの
花蔭に
によきり　出てゐる
蹠

主は誰やら
知らねども

白く　小さな
指五つ

朝來て　午來て
晩に見りや
母さんによく似た
蹠

ちよいと觸れば
消え失せて

赤いカンナの
花ばかり。

たんぽぽ

ふはり　ふはり　と
とんでゆく
春の野原の
白い煙

小人の村も
たそがれて

夕餉支度を
するころか

赤い　小さな
煙突は
草にかくれて
遠い月

ふはり　ふはり　と

たんぽぽの
白い絨毛が
とんでゆく。

さくら

いぢめつ子の家の
櫻がさいた

いぢめつ子はこはし
櫻は見たし

日ぐれに通れば

まつしろに咲いてる

いぢめっ子は家で
唱歌をうたひ

日ぐれの庭に
櫻はちつてる。

巴旦杏の夢

園丁さん
花見てた
白い巴旦杏の
花見てた

園丁さん
午睡した

春日うらうら
午睡した

園丁さん
夢をみた
白い巴旦杏の
花の海
鍬で舟こぐ
夢をみた。

向日葵

帽子屋の窓に
麥藁帽子が並んだ
黄ろく　輪に並んだ
向日葵の花だ

向日葵が散つた
十人の子供が

ひとつびとつ　かぶつて、
海へ山へ行つた。

葱坊主

旅人が　旅人が
下田街道のまん中を
ひとり泣き泣き通つた

何と泣いて通つた
山越えて　海越えて
やつと戻つた故郷の

寺の擬寶珠が見えるとて

三度笠とり駈けよれば
畠に生えた葱坊主
それが悲しと泣いて通つた。

落葉

落葉よ　落ちて
つめたかろ
わたしの袂に
入れてあげよ

日向に霜が
とけるまで

わたしの袂に
入れてあげよ。

子供の生活

われは記憶す
いかに少年の日の翔り去りしかを、
その十二月の愉樂も
はた五月の暖かさも。

ブレーム

丘の上

丘の窪地はたのしいな
空をとほるは白い雲
ねてゐるものは僕ひとり

僕はいつでも考へる
空氣銃だの　カメラだの
欲しいおもちやのいろいろを

それから死んだベスのこと
お嫁に行つた姉さんの
やさしい眼までおもひだす

いつまでひとり寢てゐても
いつまでなにを想つても
誰も叱らぬ草の中

雲は行つたり　返つたり

夕ぐれ　月がのぼるまで
丘の窪地はたのしいな。

かるた

黄金の洋燈が
ついてゐた
誰か骨牌を
きつてゐた

春の夜ふけの
河岸通り

ホテルの窓を
のぞいたら

たつたひとりの
指さきが
たつたひとりで
淋しそに

誰か骨牌を
きつてゐた

そとにや小雨が
ふつてゐた。

藥とり

鳥は鳥ゆゑ
おとなしく
林の奥の巣にねむり

月は月ゆゑ
さびしくも
はる〳〵空をひとり旅

僕は兄ゆゑ
たのまれて
遠い夜道を藥とり。

草鞋をすてて

——遠足にて子がうたへる——

草鞋よ　草鞋よ
さやうなら

夕日が赤い
田舍みち
切れたばかりに
棄ててゆく

草鞋よ　草鞋よ
さやうなら

都そだちの
おまへゆゑ
今夜は夢が
さびしかろ

古い草鞋よ
さやうなら。

のこり花火

濱の子供と
うち上げる
殘り花火は
さみしいな

今年の夏も
これぎりよ

明日は汽車で
歸るのよ

沙には黑い
海がらす
葭簾の茶屋の
秋の風

雨の霽れまを
うち上げる

殘り花火は
さみしいな。

怪我

ふいても　ふいても
血が滲む
泣いても　泣いても
まだ痛む
ひとりで怪我した
くすり指

ほかの指まで
蒼白めて
心配さうに
のぞいてる。

お留守の玩具屋

お留守の
お留守の
玩具屋さん

玻璃戸
締つて
青柳

お馬も
人形も
さみしさう

妹と
二度來て
またかへる

春の

田舍の
玩具屋さん。

夕顔

去年遊んだ砂山で
去年遊んだ子をおもふ

わかれる僕は船の上
送るその子は山の上

船の姿が消えるまで

白い帽子を振つてたが
けふ砂山に來て見れば
さびしい波の音ばかり

あれほど固い約束を
忘れたものか　死んだのか

ふと見わたせば磯かげに
白い帽子が呼ぶやうな

駈けて下りれば　夕顔の
花がしよんぼり咲いてゐた。

活動寫眞

活動寫眞の母さんは
おもい病氣で死にました

可愛いいトムは倫敦の
街で新聞賣つてます

トムの父さん惡漢で

汽車の窓から逃げました

活動寫眞の幕が下り
出れば靜かな田舍です

ぼくの右にはお父さん
ぼくの左にやお母さん

はやく歸つておやすみと
月夜の雁が啼いてます。

廻り燈籠

晝まの風に
まはつてる
廻り燈籠は
さびしいな

お父さんも
おひるね

お母さんも
おひるね

紫蔵の
花あかく
うへに搖れてる
青い空

お晝の縁で
まはつてる

廻り燈籠は
さびしいな。

お山の大將

お山の大將
俺ひとり
あとから來るもの
つき落せ

ころげて　落ちて
またのぼる

あかい夕日の
丘の上へ

子供四人が
青草に
遊びつかれて
散りゆけば

お山の大將
月ひとつ

あとから來るもの
夜ばかり。

坂

駈けたら　とまるな
駈けっぱなせ

赤い夕日の坂みちを
どんどと　とまるな
駈けっぱなせ

頭を撫でるは柳の葉
まへから來るのは豆腐やさん
錆びたラッパの音が悲し

あとから追ひこす小僧さん
自轉車ハンドル　あぶないよ
背なかの荷物が重たかろ

工場の汽笛が鳴きやんで
烏が二羽五羽とんでゆく

母さん呼ばうが　呼ぶまいが
赤い夕日の坂みちを
駈けたらとまるな　駈けっぱなせ。

玩具の舟

雪のふる夜に
母さんの
膝にもたれて
おもふこと——

あかい帆かけた
玩具の舟は

夏の川原に
忘れた舟は
どこへ流れて
行つたやら。

我家の人々

母さんの眼

母さんの眼を見てゐると
僕はお池をおもひだす

まはりに細い樹が生えて
きれいな水のまん中に
黒い小さな島がある

いつかボートを漕ぎたいな
漕いで島までゆきたいな

あんな静かな水底に
どんな魚がゐるのやら
あんな可愛いい島の木に
どんな小鳥が歌ふやら

母さんの眼を見るたびに
僕はお池をおもひだす。

頬ひげ

父さんの頬ぺた
砂濱か
波もよせぬに
ざあらざら

父さんの頬ぺた
笹藪か

風も吹かぬに
ざあらざら。

祖母と鶴

さむい冬の晩でした
遠く　遠く
凩の音が聞えてゐました

お祖母さんは
炬燵にあたつてゐました
襖に映つたその影が

くびが細く　裾がひらいて
ちやうど鶴のやうに見えました

それは五年もまへのことです
梅の花のさくころ
お祖母さんは亡くなりました

今夜も風が鳴つてゐます
炬燵にひとりあたつてゐると
しみ〴〵昔が想ひだされます

そして、あの懐かしいお祖母さんの魂が
白い鶴となつて
今夜の風のなかを　暗い空のうへを
遠く　遠く　どこまでも
翔つてるやうな氣がしてなりません。

雨夜

雨のふる夜に母さんと
ひとつの傘をさしてゆく
路の明るさ　にぎやかさ

いつも淋しい踏切も
尨犬のゐる横町も
今夜がなんで恐からう

雨よ　ざん〳〵音たてよ
ひとつの傘を母さんと
いつそ仲よくさしてゆく
夜のうれしさ　好もしさ。

肩たたき

母さん　お肩をたたきませう
タントン　タントン、タントン
母さん　白髪がありますね
タントン　タントン　タントン
お縁側には日がいつぱい

タントン　タントン　タントン
眞赤な罌粟が笑つてる
タントン　タントン　タントン
母さん　そんなにいい氣もち
タントン　タントン　タントン。

海邊で

大きな石投げろ
小さな石投げろ
投げたらひィろがれ
水の輪よ　ひィろがれ

遠く　遠く　ひろがって
布哇の濱の

ひとりぼっちの兄さんの
靴のさきにぶッつかれ。

ねえや

今日來たねえやは　いいねえや
色が白くて　背がたかく
まあお可愛い　と云ひながら
わたしを抱いてくれました。

今日來たねえやは　いいねえや
雨がふるのにおんぶして

白粉つけて　傘さして
町へ使ひに行きました

今日來たねえやは　いいねえや
町のはづれで袂から
手紙を出して泣きながら
そつとポストへ入れました

たぶん田舍の母さんに
無事で奉公しました　と

書いて知らせた手紙でせう。

見知らぬ人々

お隣さん

お母さん
お隣さんは
いつ來るの

新しいご門も
塀も出來あがり
眞紅な罌粟も咲いたのに

お母さん
お隣さんは
いつ移すの

待ち遠い
毎日つづく青い空
お庭の罌粟も散りかかる

お母さん

お隣の子は
どんなでせう。

泣きぼくろ

あの子の
ほくろは
泣きぼくろ

とほりの
酒屋へ
ゆくみちで

燕が
三羽で
話してた

今夜の
月の
あをいこと。

船頭の子

橋のうへから
川見れば
黒いはだかの
船頭の子

午の傳馬の舷で
とんぼがへりを

うちながら
「嬢ちやん　嬢ちやん
花おくれ」

乳母のみやげの
向日葵の
花をわたずは
惜しけれど

つい誘はれて

投げやれば
ねらひは外れて
水のなか

ぺろり　舌だす
船頭の子
とんぼがへりを
うちながら
「嬢ちやん　嬢ちやん
花おくれ。」

牧場の娘

牧場の牛は
五十と三頭

牧場の柵は
四十と三本

牧場の百合は

けさ見て七つ
牧場の娘
たゞつたひとり
それでも顔に
黒子が三つ。

赤い獵衣

赤い獵衣の王子さん
日和よいとて　にこにこと
けふも鐵砲を肩にかけ
伊達の獵衣も見せたいが
伊達の鐵砲もうちたいが

山を歩けば人が見ず
町を歩けば鳥がゐず

思案するまにポツポツと
朝の時雨がふりかかり

けふも鐵砲を肩にかけ
すごすご戻る王子さん
赤い獵衣の王子さん。

木のぼり太右衞門

いつちく　たつちく　太右衞門が
いつちく　たつちく　無花果の
枝にのぼれば　日が暮れる

いつちく太右衞門　お侍
お寺の縁で午睡して
鴉に大小さらはれて

山から　藪から　田圃から
たづねあぐんだ大髻
元結もきれて思案顔

いつちく　いそいだ　太右衞門が
いつちく　いちいち　無花果の
枝をゆすれば　月が出る。

天と地

お月さん

お月さん
ひとりなの
わたしもやっぱり
ひとりなの

お月さん
空の上へ

わたしは並木の
草の上

お月さん
いくつなの
わたしは七つの
親なし子

お月さん
もうかへる

わたしもそろそろ
ねむたいの

お月さん
さやうなら
あしたの晩まで
さやうなら。

夏の雨

夏の雨は
わるい雨
銀の火箸を
投げつけて
僕の花壇を
うちこはす

夏の雨は
ずるい雨
白い天蠶絲を
繰りおろし
池の緋鯉を
釣りかける。

雪の手紙

さらさらさらと
巻いてゆく
雪の手紙の
長いこと

夜ふけの窓の
玻璃ごし

甜菜畠も
丘の木も

星もかくして
白々と
家のまはりを
巻いてゆく

誰に宛ててのの
たよりやら

雪の手紙の
長いこと。

花火

花火　花火

荒野のやうな
さびしい空に
咲くかと見れば

花びらが　ぱらり

蕊の粉が　ほろり
あとなく消える

花火　花火

おまへは
庭の
昨日の罌粟か。

晝のお月さん

晝のお月さん
まつしろな鞠よ
紅い木靴で
蹴つて　蹴つて
飛ばそ

飛んで　はずんで

山越え　野越え
海を越えれば
青空ふかい

白いお月さん
晩まで入らぬ
紅い木靴で
蹴つて　蹴つて
遊ぼ。

星と苺

赤い苺が
もう實らぬ
苺畑の
さびしさよ

あちら　こちらと
探しても

青い葉つぱに
風のおと

赤い苺は
見えずとも
夏の夕の
たのしさよ

弟とあふぐ
大空に

星はすずしい
數をます。

川邊の夕ぐれ

入つたり　出たり
夕潮みちて
川邊の杭は

入つたり　出たり
蘆の葉搖れて
沙地の蟹は

入つたり　出たり
ひとりの旅に
雲間の月は

入つたり　出たり
草家の門に
子を待つ母は。

お清書

空のお清書
今夜は滿點
まるい　大きな
お月さま

空のお清書
今夜はばつ點

雁が斜に
一文字。

秋風

秋の風はうれしいな
秋の風を聞いてると
お父さんの聲がする
お母さんの聲がする

見わたすかぎり遙々と
野山を越えてくる風よ

燕のやうに故郷の
海をわたつて來る風よ

ほんとにおまへを聞いてると
遠く　遠く　なつかしい
お父さんの聲がする
お母さんの聲がする。

水たまり

水たまり　水たまり
草ぐさのなかの水たまり
ゆうべは雁が映つたろ
かへる雁が映つたろ

今夜は星が映つてる
映つて　光つて　ふるへてる

夕ぐれの水たまり
草ぐさのなかの水たまり。

しぐれ

時雨のこびとよ
下りてこい
金の洋燈を手に持つて
足並そろへて
夜更けて
ぼくのお屋根に下りてこい

時雨のこびとよ
覗きにこい
金の洋燈をちよいと消して
ぼくと母さんと
眠つてる
お窓の玻璃を覗きにこい。

案山子と海

案山子
案山子
田の案山子

山で生れて
山で死ぬ
おまへは海が

見たからう

案山子
案山子
田の案山子

ゆうべ擔いで
海へゆき
渚の砂に
たてたらば

夜の夜なかに
波がきて
案山子かはいや
かげ知れず。

玩具と道具と食物

われらは永久に小兒である。而して不斷に新しい玩具を追ひ求めつつある。

アナトール・フランス

蠟人形

蠟人形はすやすやと
煖爐のうへでねてました
おもてはひどい吹雪です

夜ふけ　小さなご主人は
蠟人形がさむかろと
あつい緋羅紗を着せかけて

煖爐の上へのせました

蠟人形は樂しげに
夢を見ながらねてゐます
夜明けのころは姿もなく
溶けてゐる身と知りもせず

煖爐の火は花のやう
おもてはひどい吹雪です。

鉛の兵隊

鉛の兵隊
すてられて
けふで三日も
溝のはた

足は折れても
巣が戀し

むかし暮した
玩具函

喚きや
大きな尨犬が
のそのそ寄つて
嗅いでゆく

鉛の兵隊
泣顔に

霙がちらちら
降つてきた。

こどもの椅子

春の日が
ぽゥかぽか
椅子屋の店に
子供の椅子が並んだ
背の順に並んだ

どんな子が購つて

どんな子が掛けて
足ぶらぶらさせよ

塗りたてのニスに
蝶々がとゥまつて
椅子屋の店に
春の日が
ぽゥかぽか。

古銀貨

秋の夜長の
蠟燭の
かげで眺める
古銀貨
　り　り　と蟲が啼いてゐる
嚴い顏した

老人は
いつのペルシャの
王樣か
　長いお髯が寒さうな

誰につれられ
海山を
越えて日本へ
來たのやら
　黑い手垢も懷かしい

秋の夜長の
ゆれる灯に
光る異國の
古銀貨
遠くで蟲が啼いてゐる。

夢の人形

お人形、お人形
ゆうべの夢のお人形
足をくじかれ
手をもがれ
人も通らぬぬかるみに
落ちて泣いてた
お人形

おもひ出せば
七日まへ
せがむ従妹に
やつてから
わたしのものぢや
ないけれど

可愛い　いとしと
抱いてねた

むかしの夜を
忘れねば
ゆうべの夢が
氣にかかり
ねざめ寂しい
お人形。

寂しい旅人

黒いズボンに靴穿いて
日にち毎日旅をゆく
時計の針は寂しかろ

一時の山にや樹が一本
二時の林にや樹が二本
三時の谷にや樹が三本

四本五本とをりをりに
日蔭はあれどその間は
白い花咲く原ばかり

誰に逢をとの約束か
日にち倦かずに旅をゆく
時計の針は寂しかろ。

親子の針

時計の針は
親子針

さきへ行くのが
お父さん
黒いのつぽな
お父さん

あとをよちよち
ついてゆく
足の重げな
こども針

けふもけふとて
雪ぞらに
はなればなれの
旅をゆく

親子の針は
さびしかろ。

人形の足

母さま　母さま
草原に
人形の足がありました

赤いヅボンに長い靴
可愛い騎兵の片足が
もげて　轉げてをりました

しづかな夏の
あけがたに
誰が戰をしたのやら

母さま
青い草原に
人形の足がありました。

鉛筆の心

鉛筆の心
ほそくなれ
削つて　削つて
細くなれ

三日月さまより
なほ細く

蘆の穂よりも
なほ細く
燕の脚より
なほ細く
ヴボンの縞より
なほ細く

朝の雨より
まだ細く
豌豆の蔓より

まだ細く
鑫斯の髭より
まだ細く
香爐の煙と
消えるまで

鉛筆の心
ほそくなれ
削つて　削つて
細くなれ。

霙ふる夜

霙ふる夜に
かるたをとれば
可愛い兵隊の札が無い

赤い帽子に
短剣さげて
どこへ紛れて行つたやら

霙ふる夜に
さびしく偲ぶ
可愛い兵隊のひとり旅。

はがき

ポストの前へ立つたびに
僕ははがきになりたいな

こんなに痩せて青白い
弱いからだでありながら

母さんの字を背にしよひ

ひとりで海や山を越え

はるばる遠いアメリカの
戀し父さんに逢ひにゆく

おもへば強い　勇ましい
はがきに僕はなりたいな。

麥藁帽子

麥藁帽子、麥藁帽子
黄ろい　鮮しい麥藁帽子
昨日忘れた麥藁帽子

たづね倦んだ砂山かげで
あたりしみじみ見廻せば
そこにもこゝにも見渡すかぎり

黄ろく落ちてる麥藁帽子

なんの案じることかはと
胸のうれしさ　氣の輕さ
われを忘れて蒲公英の
花を掴んだ、――麥藁帽子。

ながれ椅子

渚の
古椅子
こはれ椅子

誰が
昔に
かけたやら

月夜の
渚は
風ばかり

ときどき
鷗が
とまつてる。

時計屋の時計

ボン　チン　ゴン　キン　カン

柳の葉かげの
時計屋の時計

まるいと長いと
いびつと　六かく

くろいと　白いと
みどりと　栗いろ

かたちは變れど
色こそちがへど

午砲さへ聞えりや
そろつて鳴りだす

ボン　チン　ゴン　キン　カン。

なくした鉛筆

背戸の
榎の
山がらす
僕の鉛筆知らないか

きのふ
落して

見あたらぬ
僕の鉛筆知らないか

銀の冠
赤い纓
王子のやうな顔をした
可愛い鉛筆知らないか。

大毬小毬

大毬　小毬
おもちや屋の棚に
ずらり並んだ
ゴム毬

いつ見ても
行儀よく

背の順にならんだ
親毬　小毬

けふ來て覗きや
三番目が見えぬ
誰が買つたぞ
氣になるゴム毬。

仲よし小よし

仲よし小よし
朝の麵麭
ふとつた兄弟が
一斤二斤
しつかりくつ着き
切らなきや離れぬ
仲よし小よし

仲よし小よし
莢豌豆
莢のなかには
親子が五人
ずらりと並んで
食べなきや別れぬ
仲よし小よし。

お皿の祭

お皿の
まんなか
お祭だ

まぐろの
お鮨は
赤半纏

あをい
背廣は
鯖のすし

海苔巻
きほひの
はちまきで

わさびの
花車を

曳いてゆく

お皿の
おまつり
賑かだ。

お菓子の汽車

ガッタンコッコ　ガッタンコ
お菓子の汽車が走ります
お鑵はまるい唐饅頭
黒いレールは飴ん棒

ガッタンコッコ　ガッタンコ
お菓子の汽車が急ぎます

長い煙突　あるへい糖
つながる函はチョコレイト

ガツタンコツコ　ガツタンコ
お菓子の汽車が笛鳴らし
ゾロゾロ入る隧道は
ぱつくり明いた犬の口。

謎

謎（一）

くろいは
午の葡萄の葉
白いは
月夜の蘆の穂

葡萄の下には
栗鼠がねて

蘆の穂かげにや
鴫がすむ

葉を打ちや
しづかな栗鼠の聲
穂を搖りや
月夜の鴫が啼く。

（ピアノ）

謎（二）

朝見たときは
黑い鴉
羽根を縮めて
寒さうに
灰に埋れて
啼きもせず

午に覗けば
赤い鴉
いつの間にやら
緋の袈裟ころも
殊勝顔して
お念佛

夜に探せば
白い鴉
白髪頭の

老いぼれ姿
やがて崩れて
灰ばかり。

（火鉢の炭）

やさしいうた

四歳の小兒の如く慧こく　　イエーツ

ほこり

眼へ埃がとび込んだ
こすつて　こすつて　まだとれぬ
うらの垣根へ凭つてたら
隣の伯父さん聲かけた
「坊ちやん　父さんに叱れてか」

おもての通りへ出て來れば
向ひの姉さん聲かけた
「坊ちやん　どの子がいぢめたの」
誰も知らない眼の中の
埃がこすつてまだとれぬ。

來い　來い　來い
來い　來い　來い　と
隣の子
大きな聲で呼んでゐる
裏から急いで
犬が來た
それでも子供は

來い　來い　來い

緣から三毛猫
飛んできた
それでも子供は
來い　來い　來い

何をいつたい呼ぶのかと
隣の子供に訊いたらば
「ぼくの呼ぶのはお正月。」

帽子

大きな帽子を買ひました
ひとりでかぶつてまだ餘る
父さん　母さん　いらつしやい
みんなでかぶつてまだ餘る
お家の無い人みんなお出で

そろつてかぶつてまだ餘る
象も鸚鵡もペンギンも
さァさ入つて春の日の
町をたのしく廻りましよ。

かへりみち

おもての通りにや
いぢめつ子
うらの路地には
尨犬

夕ぐれはぐれて
ぼくひとり

どうすりやお家へ
歸れましよ

思案するまに
母さんに
呼ばれて行つた
いぢめつ子

赤い首環の
三毛猫を

向へ追つてく
尨犬

やれやれ安心
歸りましよ

とっととお家へ
歸りましよ。

晝の出來事

犬がわあわあて
かけてきた
猫がいそいで
にげてきた
目白も歌を
やめました

しづかな晝の
出來ごとは
喧嘩でせうか
火事でしよか

いえいえ　おもてを
自働車が
大きくほえて
ゆきました。

手紙かき

さらさら粉雪のふる晩に
みんなで揃つて手紙かき

母さん出すのはお祖母さん
田舎で達者なお祖母さん

兄さん出すのはお友だち

「あさつて歌留多をとりませう」

わたしの出すのは先生よ
「めでたく申納め候」

お室の中も温かい
みんなの心も温かい

さらさら粉雪のふる晩に
炬燵のうへで手紙かき。

譯論集

子供と鼠（ロオレンス・アルマ・タデマ）

お庭の花はたのしさう
そこには蜂がゐるゆゑに
み空の雲はたのしさう
いつも天使がゐるゆゑに
けれど　都の家に住む
子供と鼠はさみしいな。

お庭で（おなじく）

鶫の巣が落ちた
壁の蔦から落ちた
青い卵がころ〳〵と
落ちてすつかり破れちやつた

日ぐれに歌が聞えた
「泣いてもむだよ」と聞えた
ぼくらは泣くのをやめました

鶫はまた巣をつくるでせう。

雲雀と金魚（おなじく）

ひばりよ　高く飛ぶひばり
おまへはいつも飽きないか
さびしい空に着いたとき
雲を凄いと思はぬか
時には海の默つた
金魚になりたく思はぬか

金魚よ　深みをゆく金魚
おまへにや悲しいことないか
冷たい波がさはるとき
おまへは心からうれしいか
時々おまへは羽根が生え
雲雀になつて大空で　歌ひたいとは思はぬか。

誰もわたしを（おなじく）

誰もわたしをお嫁に貰つてくれなかつたら
——だつてさうかも知れないわ
ばあやはわたしを不縹緻だつて言ふし
それにおとなしくも無いつて言ふんですもの
誰もわたしをお嫁に貰つてくれなかつたら
——でもかまやしない

わたしは籠に入つた栗鼠と
それから小ちやい兎の小屋を購ふの

わたしは森のそばに家をたてて
わたしだけ乗る小馬と
それから町へつれてゆける
きれいな　おとなしい小羊を飼ふの

そして、わたしがほんたうに大人になつたら
——さう、廿八か九になつたら——

わたしは小ちやい親無しつ娘を購つてきて
わたしの子にしてそだてるの。

進軍の歌（ロバート・ルイス・スティーヴンスン）

櫛を持つて來て彈き鳴らせ！
それそれ　さつさと進んだり！
キリイが帽子を横かぶり
ジョニイが太鼓をうち敲く

メイリ、ジェーンが指揮官で
ピータが殿ひきうけた

足並そろへて油斷せぬ
みんなは近衛の兵隊さん！

軍律正しく速足で
進めば杖のうへ高く
布巾の旗が
ひるがへる！

名譽も獲物もたんまりで
ジェーンの指揮官大成功！

村中ぐるりと廻つたら
どれどれ　お家へ歸りませう。

唄（おなじく）

小鳥は斑の卵をうたひ
樹間がくれの巣を歌ふ
水夫は海の船々の
綱や道具を歌つてる

遠い日本の兒はうたひ
また西班牙の兒も歌ふ

人に彈かれてオルガンは
細雨のなかで歌つてる。

寢臺の舟（おなじく）

ぼくの寢臺は小ちやなボート
ばあやが船出のお手傳ひ
水夫の服を着せかけて
まつ暗闇へおし流す

「おやすみなさい」の一言が
別れの船のごあいさつ

それなりぢつと眼をつぶりや
何にも聞えず　また見えず

水夫する身の拔目なく
寢臺へ持ち込む品々は
お祝菓子の一きれか
時にや玩具が二つ三つ

夜つぴて闇を漕ぎまはり
いつか明るい朝になりや

馴れたお室の棧橋に
寢臺の舟はもと通り、

人形（クリスティナ・ロセッテイ）

鐘はそろつて鳴つてゐた
鳥もそろつて歌つてた
モリイがこはれた人形の
そばに坐つて泣いたとき

おお　ばかなモリイよ

おまへがこはれた人形の
そばでしくしく泣くときに
鐘はそろつて鳴つてゐる
鳥はそろつて歌つてる。

風（おなじく）

誰が風を見たでせう
僕もあなたも見やしない
けれど木の葉を顫はせて
風は通りぬけてゆく

誰が風を見たでせう
あなたも僕も見やしない

けれど樹立が頭をさげて
風は通りすぎてゆく。

さくらんぼ（おなじく）

母さんが櫻の樹を搖り
スウザンがその實を受けとめる
その時やどんなにをかしかろ
その時やどんなに樂しかろ

一つは兄さん　一つは姉さん
あとの二つはお母さん

お父さんには六つときめて
汗も拭かずに扉をたたく。

馬に乗つたひと

（ウガーダ・デ・ラ・メーヤ）

馬に乗つたひとが
丘をゆく音きいた
月は冴えて
夜はしづか
兜は銀で
お顔が青い
乗つてた馬は

象牙のお馬。

豚と炭焼き（おなじく）

親豚　子豚を呼びあつめ
「森には菌がたんとある
團栗ころころ轉げてる
おいらの後から蹤いて來な
これこれ　さつさと蹤いて來な」

炭焼男　樹かげて　拇指で

顎をおさへて眺めてた
親豚子豚がよちよちと
森へ來るのを眺めてた

炭燒男や青葉の枝の下
豚たちやがつがつ鼻鳴らし
かさこそ地べたを
嗅ぎまはる

お腹がはつたで豚たちは

出てゆく　あとには夜の星
炭燒男や兩手を頰にあて
陰氣な火かげを見つめてた。

ふうりんさう（おなじく）

風鈴草と風のあるとこで
フェーヤリが輪になつて踊つてた
そばに小さな紅鶸が
歌つてゐるのが聞えた。

櫻草と露のあるとこへ
フェーヤリはみんな駈けてつた

あとには芝生が輝いて
紅鶸ばかりが鳴いてゐる。

老ぼれ兵隊（おなじく）

老ぼれ兵隊さんがやつてきた
パンの皮だけお呉れといつた
戰爭ですつかり痩せてゐた
その筈　どこでも戰つて
フォル　ロル　ドル　ロル　ディド
鼻はつん出る　頰ぺたはくぼむ

ちくり　ちくりと　顎髯や生える
火藥　鐵砲玉　切傷　太鼓
みんな揃つて兵隊さんを攻めた
フォル　ロル　ドル　ロル　ディド

いまは五月の樂しい春よ
どこの梢もみな花ざかり
パンを喰べたら兵隊さんはうたふ
若い昔のかはらぬ唄を
フォル　ロル　ドル　ロル　ディド。

かりうど（おなじく）

にこにこ紳士が三人で
赤い上衣で
お馬へ乗って
ぼくの寝どこへやって來た
にこにこ紳士が三人で
朝まで鼾をかきました

お馬が喰べたは
黄金の麥

にこにこ紳士が三人で
夜あけに下りて行きました
カタリコトリと階段を
下りてどこかへ行きました

支那の子守唄

廿日鼠が蠟燭へのぼつた
心を嚙ろとさきまでのぼつた
上りや上つたがどうして下りよ
そこで困つて泣聲あげた
町中起きるよな泣聲あげた
マ　マ　マ！　マ　マ　マ！

夕ぐれ（セエ・カルツレエ）

子供よ　そろそろ日が暮れた
お家のまはりに日が暮れた
月が出たらばおとなしく
子供はいつも眠るものよ

子供よ　羊は戻ります
啼き啼き草家へ戻ります

青い眼をちよいと閉り
子供はしづかに眠るものよ

子供よ　夢に見るものは
ながれの岸の雁來紅
梢にうたふ可愛い鳥
子供は夢みて眠るものよ

子供よ　おびえずよく眠れ
恐い夢みたそのときは

おまへを守る神さまを
念うて子供は眠るものよ。

西條八十童謠全集の後に

本集には私が今日まで書いた童謠の殆んど全部を採錄した。

童謠の製作は二つの條件を必要とする。その一つはそれが詩としての香氣を持つこと。さうしてもう一つは幼き者等の愛誦に適すると云ふことである。童謠の製作が或る場合通常の詩の製作よりも困難であると云はれるのは、この二つの條件を竝備せねばならぬからである。衡秤の一端が孰れかに多く傾むくとき、その謠は全く藝術的香氣を失ひ、或は兒童にとつて無關心のものとなり終る。

大正七年以來、私はともかくもこの綱領の下に童謠の製作に努めて來た。併しながらその結果に想ひ到ると忸怩たらざるを得ない。

以下記すところは本集編纂の傍、收むるところの童謠について思ひつくままを書きつらねた「覺え書」乃至は「小さき解題」とも稱すべきものである。讀者にとつて多少の興味又は參考ともなれば倖せである。

なほ、私の懷抱する童謠觀に就ては、同じ社發行の「童謠の作り方」なる書を併讀して頂きた

い。又本集目次中に＊印の附されてゐるものは、山田耕作、弘田龍太郎、本居長世、成田爲三、草川信、中山晋平、大和田愛羅、寺崎浩等諸氏の作曲の有るものである。

思慕と追憶

「つくしんぼ」では春になると私の胸に蘇つてくる或る遠い幽かな追憶をうたつた。時も場處も定かでない、現世の經驗ともまた前世の出來事とも判然しない怪しくまた懐かしい記憶である。私にはかうした感動を持つ者が自分獨りでは無いやうな氣がする。

「幌馬車」は、歳月の推移とともに寂しく葬られる人間の希望を、約束を象徴的に試つたもの。

「山の母」。かうした夢を私は屢々幼い日の臥床で見た。又目覚めてゐる時でも自分の傍にゐる母親はほんたうの母親でなくて、どこか遠いところに眞實の生みの母親が隱れてゐるやうな怪しい氣持をよく味つた。この見えざる母への思慕の念は成人となつた今の私の胸にも日夜悲しく燃えてゐる。すなはち、この謠は私の追憶詩であると同時に、宇宙の宏なる母を摸索して、未だに懐疑の岐路を彷徨してゐる現在の私の精神生活の寂しい象徴である。

「古い港」。これには疲弊した成人の世界を厭ふ幼き者の憧憬とした心を描いた。

未知の世界

「お草子の家」。いかにこの世の風が荒く冷たく當らうとも、可憐な孤兒たちのためには、必ず見えぬ手が何處かに温かい愛護の家を造つて持つてゐる。これは淋しい運命を持つた兒等への慰藉のうたである。

「手品」。これは兒童の飛翔自在な空想を詠つたもの。「白いボート」も同樣である。

「巨きな帽子」。私たちはかの蟻と螳螂と鳩と獵師との寓話のやうに、私たちを背後から窺つてゐる更に大きい生物を忘れてはならない。これはその世界の消息の一片である。

鳥のうた

「かなりや」を書いた當時の心持に就ては、「詩の味ひ方」といふ書物の中に委しく述べて置いた。一般に動物愛護の歌と解されてゐるこの謠のかげには、過去の或る時期に於ける私の苦悶の姿が宿されてゐる。「歌を忘れた金絲雀」とは當時、吾と自ら詩を離れて商賈の群に入

り埃ふかき巷に錙銖の利を爭つてゐた私自身の淺ましい姿であり、又この愚鈍なる小禽を或は鞭たうとし、或はやさしく押し止める母子の對話は、とりもなほさず私自身の心内に聽かれた自閥自責の聲である。私は今でも巷を歩いて愛らしき子供等の脣からこの謠を聞く時、寂しかりし當時の生活を追想して涙なきを得ない。なほ「たそがれ」も其頃のおなじ心持から生れたのである。

「鳶ひよろひよろ」では禽類と人間との美しい交愛を詠つた。

花と草木

「薔薇」は抑も私が雜誌「赤い鳥」へ最初に寄せた童謠である。船中に忘れられた紅い薔薇の花によつて、私は「眞理」を暗示しようとした。それを掴む者を盲者としたのは、私の持つ寂しいアイロニイである。

「亘きな百合」では、私は不斷に遠いわれらの理想を象徴した。

「あしのうら」は、この宇宙の山川草木一として神の象徴ならざるは無いと云ふ汎神教的な觀念から書かれた。赤いカンナの花蔭にほの見える、母親のそれに似た白い蹠とは、草の葉

一ひらにも住してゐる神の部分的顯現を語るものである。

子供の生活

「お山の大將」は啻に夕暮子供等が去つたあとの寂しい野原を詠つたのみでなく、人類のはかない鬪爭の終結した後、この世界を領ずる自然の靜謐さを暗示しやうとしたのであつた。

「玩具の舟」。この謠について私は嘗て或る處でこんな風に書いた。「子供といふものは飛んでもない時に、ふいと何かを想ひだすものである。さら〳〵粉雪が窓にあたる靜かな冬の夜、母の膝にもたれてゐた幼兒は、過ぎた夏の日、川原へ忘れたなりになつた赤い帆の玩具の舟を想ひだした。さうしてその舟が流れ〳〵て、堰のあたり、或は青い葦のしげみに、毀れて半ば沈んでゐるやうな姿を幻のやうに想ひ浮べたのである。かうした幼い日の苟且の記憶は、おなじ少年時代に於てのみならず、人の父親となつた今日の私たちの胸にさへ、折にふれてふと浮んでくることがある。さうして繁劇の身にしばし優しい甘い夢を結ばしめる。」

我家の人々

「肩たたき」。この謠に關しては私個人として忘れ難い追憶がある。大正十二年の秋、四歳の短かい生涯を以てわれらの溫かき團欒を去つた亡兒慧子は、私が「幼年の友」のために書いたこの謠を殊のほか愛誦してゐた。さうしてつねに「母さんお肩をたたきませう、タントン、タントン、タントントン」と廻らぬ口で歌つてゐた。この謠を聞くと、私の前には彼女のひびの切れた赤い頰べたと、その慧しい眼とが浮ぶのである。

天と地

「雲のお月さん」。これも幼童のはろ〳〵とした自在な空想を詠つたもの。

玩具と道具と食物

「人形の足」はあの記憶すべきニコライエフスクの虐殺のちやうど一周年の日に書いた。私

はその日當時住んでゐた郊外池袋のと或る空地の靑草の上に落ちてゐた人形の片足を見て、そゞろにあの取返し難き慘劇を想ひ合せた。

譯謠集

「子供と鼠」其他の作者。ロオレンス・アルマ・タデマ女史(Laurence Alma-Tadema)は現代英國の閨秀詩人で詩集「知らない王等の國」(Realms of Unknown Kings)の著者である。女史の童謠は好んで子供等の小さき懊惱哀愁をうたふ點に於て特色を持つてゐる。

「進軍の歌」其他の作者、ロバート・ルイス・スティーヴンスン(Robert Louis Stevenson)(1850-1894)は誰も知る有名な英國の詩人で童謠集「子供の謠の園」(A Child's Garden of Verses)の著者である。童謠には兒童の冒險好奇の心を取扱つたものが多い。

「人形」其他の作者、クリスティナ・ロセッティ(Christina Georgina Rossetti)(1830-1894)女史はラファエル前派の畫家にして詩人たるダンテ・ゲブリエル・ロセッティの妹である。童謠集には「うたひ唄」(Sing-Song)がある。その謠は優しい母愛にみちたものが多い。

「馬に乘つた人」其他の作者、ウォータ・デ・ラ・メーヤ(Walter de la Mare)は現代英國の詩人

で、童謡集には「幼年の唄」(Songs of Childhood)や、「孔雀のパイ」(Peacock pie)などがある。その謡は月光下の薔薇を見るやうな、夢幻的色彩に富んでゐる。

(大正十二年十二月)

大正十三年五月十九日印刷
大正十三年五月廿五日發行

(定價貳圓五拾錢)

著作者　西條八十

發行者　京東市牛込區矢來町三番地　佐藤義亮

發行所　東京市牛込區矢來町三番地　新潮社
電話牛込(局)八八〇九番　八八〇八番　八八〇七番　八〇六番

◀西條八十童謡全集▶

印刷所　東京市小石川區西江戸川町五九二番　富士印刷株式會社
印刷者　佐々木俊一

振替(東京)一七四二番

西條八十氏著　加藤まさを氏装幀

詩集

赤き獄衣

羽二重表紙天金
菊半截二百頁
定價壹圓四拾錢
郵送料拾錢

西條八十氏の小曲幾十篇を收めて、こゝにこの可憐の新集成つた。その想やあくまで哀婉。その調やあくまで優麗。たとへば、夕風にみだるゝ雛罌粟の如く、夕月にほのめくつき草に似たり、別れたる戀人をなげき、失はれたる夢に泣く。字々珠玉、句々精金、これを西歐の名詩と較ぶるも、些の遜色を見ないであらう。裝幀、また優麗の趣をこらし、內容にふさはしき可憐の書である。

忽ち九版

■詩集　わが家（近刊）　西條八十氏著

■新しき童謠の作り方（近刊）　西條八十氏著

新潮社出版

P